

Prajñākaragupta による夢の無所縁性証明

林 慶 仁

[1] 9-10世紀に活躍したと言われる Prajñākaragupta (Prajñākara と略す) は、師と呼ぶ Dharmakīrti 同様、仮に経量部説を是認しつつも、本来的な立場においては外部対象を認めない唯識学派即ち Nirāmbanavādin (認識が外部対象を所縁として持たないこと—以下無所縁性とはこのことを指す—を論じる者) と呼べるであろう。更に Prajñākara はその無所縁性証明においても Dharmakīrti の解釈を継承しつつ発展させた業績を持っている¹⁾。その一つの現われが彼特有の夢解釈だと言ってよい。本来夢は、Vasubandhu の Viṃśatikā 以降唯識派においては〈覚醒知にとって外部対象が所縁でないことを証明するための比喻〉として用いられたが、唯識学派の夢解釈に対する批判が Nyāya 学派²⁾ や Mimāṃsā 学派³⁾ から起こる。それに反論したのが Prajñākara である。本稿は Dharmakīrti の Pramānavārttika (PV と略す) への Prajñākara による注釈である Pramānavārttikabhāṣya (Patna, 1953 PVBh と略す) の中で扱われる夢の認識の一端を説明することを目的とする。抑も PV では夢の認識は扱われる回数が極めて少ないがその PV の扱う数少ない夢の認識の議論に対する、Prajñākara の記述を見ていこう。ここでは PV Ⅲ 15, 16に対する彼の注釈を通じて〈夢の認識が外部対象を所縁として持たないこと〉という一見明白に見えることの証明を通じて、彼独特の思想を考えてみたい。

[2] Vātsyāyana (Nyāya 学派) は Nyāyabhāṣya で〈認識の対象にとっての真理 (tattva)〉を〈有 (sat) によっては実在 (sadbhāva), 無 (asat) にとっては非実在 (asadbhāva)〉⁴⁾ と述べるのに対して (Nyāyadarśanam, Bauddha Bharati 1984, p. 4, 5), Prajñākara は無所縁性 (anāmbanatva) と断言する (PVBh p. 195, 4)。そしてその無所縁性証明に夢の認識は重要な役割を果たしている。外部対象の非実在性を証明するには Dharmakīrti が PV Ⅲ 353 や425等で述べた如く〈認識が形相を持つこと〉のみ論証されればよいと思われるが⁵⁾、恐らく経量部を敵者として⁶⁾ 次のような議論を展開する。〈現前する形相 (purovarttyākāra) を捉えること〉即ち認識が形相を持つことは、経量部も Prajñākara も認める所である。しかし

経量部がその〈現前する形相を捉えることは外部対象を捉えることと等しい〉とするのに対して、Prajñākara はこれを不確かな帰結を導く証因であるとするのみならず (cf. PVBh p.195, 1f. 文中 apurovartty-を Tib. 訳より puropvartty-に改める), 全く逆の結論を導くとする (cf. PVBh p.195, 4f.). それを図示すると

すべての認識：(現前する形相を捉える → 所縁を持たない) [A]

= 夢等で現前の形相を捉える [A-1]

覚醒時等でも現前の形相として捉える [A-2]

となり、これが Prajñākara の提出する認識の所縁性証明の一つの基準となる。

[3] ここでは夢に関する [A-1] に関する議論のみを見ていこう。〈夢の認識は現前する形相を捉える〉ことが示せても、無所縁性を証明するために更に別の要素を用いて補強をする必要がある。そのために特に、〈夢の無所縁性〉に関する核であると思われる〈夢中の青等は無障碍 (apratigha) であること〉と〈夢は潜在印象 (saṃskāra)⁷⁾より生じること〉との二点を見ていきたい。

Dharmakīrti の PV Ⅲ 16a を受け継いで Prajñākara も夢の認識に所縁のないことを述べる (cf. PVBh p.195, 11f.). この議論は当然覚醒知の無所縁性証明には適用されないが、逆に覚醒知と夢との違いを示す興味ある記述の一つである。図示すると次のようになる。

夢の認識：(現前する形相を捉え、しかも対象が無障碍→外部対象を所縁を持たない) [B]

夢の認識は、実際に外部にある (cf. 北京版 Yamāri 註 PVBhT (Ya) Me88b5f.) 青等が所縁ではない。何故ならば実際にある青等には無障碍性はないが夢の青にはあるから。よって敵者によって出される [B] を相違因 (viruddha) であるとする説と不成因 (asiddha) であるとする説⁸⁾は Prajñākara による prasāṅga によって否定される (cf. PVBh p.195, 15f. PVBh p.195, 16ff. 文中 anythānyathā を Tib. 訳より anyathā に改める)。

次に〈夢の認識が潜在印象より生じること〉による夢の無所縁性証明を見ていこう。この証明は〈覚醒時にも外部対象を所縁としない〉ことの証明にも通じるため重要である⁹⁾。ここでは敵者による反論¹⁰⁾のために〈潜在印象による認識が前時の事物を対象とはしないこと〉を証明することに重点が置かれて議論が進められる。〈現在とは別の時間に係わっていて、知覚する時間に存在していない (vidyamānaṃ) 対象は、知覚する時間には経験されない〉ことは Prajñākara も認める。しかし〈潜在印象のままに生じた、以前の認識による知 (pūrvadarśana-

jñāna) は知覚する時間に存在しない対象ではなく〈現に存在しつつある〉対象のみを所縁とするのであるから、〈確証される (samvedyate)〉のであって外部対象が確証されるのではない (cf. PVBh p. 196, 7f.)。よって次のように図示される。

潜在印象による認識：(現前する事物が経験される→現前に存在している対象
を持った知) [C]

[4] 以上のように [A-1] に対する無所縁性証明を二つの面から検討したが、特に後半の〈潜在印象による認識〉は覚醒知にも適用され、この後に覚醒知が〈潜在印象によらないで生じることの不合理〉が扱われる。即ち認識の有形相性の原因そのものに検討が加えられる¹¹⁾。更にここでは Viparitakhyāti・Smṛtisampramoṣa・Alaukika といった所謂 Khyātivāda が扱われるが、これらすべてについては別の機会があれば扱いたい。

-
- 1) 岩田孝「Prajñākaragupta (PVBh) に於ける有形相知識説に関する一考察」SAM-BHĀṢĀ 5 等参照。 2) 服部正明「中期大乘仏教の認識論」講座仏教思想 2 p. 106, 加藤利生「Nyāyavārttika ad NS, 2. 31-35 に於ける唯識説批判」仏教学研究 49 等。 3) 山崎次彦「ŚLOKAVĀRTTIKA における NIRĀLAMBANA-VĀDA への批判」三重県立大学教養部研究年報第 1 部第 Ⅲ 巻第 1 号等。 4) 宮坂宥勝『ニューヤバーシャの論理学』S. 31 p. 2 等。 5) 戸崎宏正『仏教認識論の研究 (下)』p. 40, p. 105 等。 6) 戸崎『同 (下)』参照。 7) 学会発表では saṃskāra を「行」としていたが、すべてこのように改める。その他御教示頂きました桂紹隆教授に感謝申し上げます。 8) ここでの敵者は直接指定されていないが、前者は内容より Nyāya 学派 (cf. 服部論文 p. 106), 後者は PV で Dharmakīrti が対論者として意識していたことから Vaibhāṣika (戸崎『同 (上)』p. 77) であろうと推測される。 9) 潜在印象とは唯識説で言われる bija (種子) や vāsanā (習気) 等に近い概念だと思われるが、今後の研究が必要である (cf. PVBh p. 102, 3 等)。また Prajñākara 以降の認識論にとっても潜在印象が重要な要素であったことは、Jñānaśrimitra が PVBh を引用することからも知られる (Jñānaśrimitranibandhāvali 1987 p. 340, 14f.)。 10) ここでの敵者は Viparitakhyāti を説いた Kumārila (PVBhṬ (Ya)Me347b3) とも思われる (cf. Tatvasaṃgrahapañjikā GOS p. 578, 11ff. 等)。しかし Viparitakhyāti 説は他に、唯識派に対する夢批判をした Nyāya 学派の可能性もあり (村上真完『インド哲学概論』平楽寺書店 p. 308ff. 等), 内容からの検証が必要である。 11) PVBh の潜在印象説に対する Nyāya 学派からの批判は、山上證道「Nyāyabhūṣaṇa の研究 (6)」京都産業大学論集 20-2 参照。

〈キーワード〉 Prajñākaragupta, 無所縁性, 夢, 無障礙, 潜在印象

(早稲田大学助手)